

Mr. HORI-NY で活躍した松江出身の写真家・堀市郎写真展

——小泉八雲が応援した写真家——

堀市郎ほりいちろうは、明治12年(1879)、現在の松江市外中原町に松江画工・堀櫟山れきざんの長男として生まれ、松江市尋常小学校卒業した。市郎をアメリカへと導いた人物に小泉八雲こいずみやくも(ラフカディオ・ハーン)がいる。市郎は、八雲が巖戸いわとにした殿町の写真師・森田禮造れいぞうの許で修行し、八雲の美保関みほのせき旅行にも同行した。旅行の5か月後、市郎は上京し、東京で孤独な生活をしてきた八雲宅を度々訪れた。アメリカでジャーナリストとして活躍した八雲との交流は、市郎にとり、その国情を知り、本場での写真研究を目指す動機づけとなった。

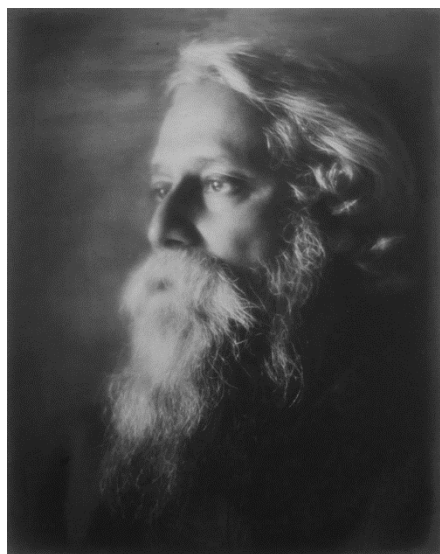
1901年(明治34)、22歳の市郎は単身渡米する。ニューヨークで成功し、「写真の開拓者」と言われた。動きのある写真で評価され、「ブロードウェイで上演される役者のポスターが、ミスター堀のものでなかったら一流でない」とすら言われた。また、無声映画時代の国際的ハリウッドスター早川雪洲せつしゅうや、蝶々夫人ちょうちょうで有名な三浦環たまき、バレリーナのアンナ・パブロアやモダンダンスの祖イザドラ・ダンカンなどの役者、日露戦争でバルチック艦隊を破った東郷平八郎などの写真を撮影した。

市郎が住んだニューヨークのアパートの隣室に、野口英世のぐちひでよ夫妻が住み、英世が患者の脳から梅毒スピロヘータを発見した際には、深夜にもかかわらず市郎の部屋へ真っ先に知らせに訪れた。市郎は英世を理解する親友で、英世に将棋や油絵を教えた。1969年没。



堀市郎肖像写真
(佐々木寛子氏提供)

【堀市郎撮影 展示写真および解説】



①アジアで初めてノーベル文学賞を受賞した
インドの詩人ラビンドラナート・タゴール
【初公開】



②野口英世と英世を何度もノーベル賞候補に推薦した
アレクシー・カレル

【裏面へつづく】

①アジアで初めてノーベル文学賞を受賞したインドの詩人ラビンドラナート・タゴール

受賞のきっかけとなった詩集『ギタンジャリ（歌のささげもの）』（川名登訳）には、「ほんとうのわたしに近づく道がいちばん遠い。」の一文がある。彼を、偉大な宗教詩人であり人類の預言者であると評価したのは、松江市殿町で生まれ、奥谷に一時住んだインド哲学者・中村元^{はじめ}である。元^{はじめ}は、タゴール記念会を設立し、長野県軽井沢のタゴール銅像にも、「詩聖タゴール 人類不戦」の言葉を添えた。この写真を掲載したアメリカの新聞は、「タゴールの神秘主義を捉える一枚」と紹介した。1921か22年撮影。タゴール 61歳。【初公開】

②野口英世と英世を何度もノーベル賞候補に推薦したアレクシー・カレル

ロックフェラー医学研究所を共にした英世とカレル（ノーベル賞受賞者）の二人の仲の良さがうかがえる写真である。野口英世は福島県出身の細菌学者。梅毒スピロヘータの純粋培養に成功し、黄熱病の病原菌調査中、アフリカのガーナで亡くなった。



③ノーベル賞受賞者
アレクシー・カレル



④島根出身の細菌学者
秦佐八郎^{はたき はちろう}



⑤野口英世の妻
メリー・タージス

③ノーベル賞受賞者アレクシー・カレル

フランス出身の外科医（1873-1944）。現代の臓器移植の基礎となる血管縫合技術は、カレルによって体系づけられ、39歳の若さで1912年度ノーベル生理学・医学賞を受賞した。1906年にNYのロックフェラー医学研究所で研究し、39年に退職した。

④島根出身の細菌学者 秦佐八郎^{はたき はちろう}

益田市美都町出身（1873-1938）。北里柴三郎に学び、当時難病だった梅毒の特効薬サルヴァルサンを開発した。1923年（大正12）2月に、アメリカ・ロックフェラー財団の招きでアメリカとカナダの医事衛生視察に訪れているので、この時撮影の可能性が高い。

⑤野口英世の妻メリー・タージス

1911年、英世は34歳でアメリカ人のメリー・タージス（35歳）と結婚した。英世夫妻の隣室に住んでいた堀市郎と妹登久子は、夫妻から頼りにされ、英世のガーナ行きの身支度も登久子がした。